

12. RIA 法による HBsAg のタイターの定量化に関する試み

鶴田 初男 金森 勇雄
木村 得次 市川 秀男
(大垣市民・特殊放射線センター)
中野 哲 綿引 元
北村 公男 武田 功
(同・2内)
佐々木常雄
(名大・放)

1) HBs 抗原の RIA kit での結果は cut off との比率で表わすため、定量的とはいえず、kit において定量的測定が可能か否か検討した。

2) kit の positive control を標準品として定量を行なってみると、検体希釈率 100 倍以上で希釈、回収試験、再現性も満足された測定が可能であった。同時に行なった R-P HA との相関も良好であった。

3) 臨床的検討では、急性肝炎での臨床経過を定量した抗原量とよく平行し、頂値を過ぎてから急速な減少を認めたものは急性と推測でき、持続陽性者との鑑別がより明らかとなった。

4) 現在、検討中の RIA kit による anti HBc の抗体価を併せて考えれば、急性肝炎か carrier state からの発症かの鑑別が one point で診断が可能であると考ええる。

13. 血液および十二指腸液中の RIA による Trypsin の測定について

中野 哲 綿引 元
武田 功 北村 公男
(大垣市民・2内)
鶴田 初男 金森 勇雄
(同・特殊放射線センター)
佐々木常雄
(名大・放)

RIA kit を用いての血清 trypsin の測定は、再現性、回収試験、希釈試験などの基礎的検討を加えて、いずれも満足しうるものであった。

空腹時の血清 trypsin の正常値は、66~295 ng/ml で、男女差はみられなかった。

血清 amylase, 血清 lipase との相関は、それぞれ相関係数 $r=0.79$, $r=0.76$ と良好であった。

急性肝炎、慢性再発性肝炎の経時的変化を amylase, lipase, trypsin の 3 つの酵素の変動としてみると、平行する場合もあるが、必ずしも同じ動きを示さず、trypsin は lipase と似た動きを示し、今後の検討が必要である。ps 試験時に膵酵素として amylase, lipase, trypsin と 3 つの酵素とを測定しておくくと amylase より変動が激しく、lipase の測定と共に従来不明であった病態生理の解明に役立つと考えられた。

14. EIA, RIA, R-PHA 法による HBsAg 測定の比較検討

金森 勇雄 鶴田 初男
木村 得次 市川 秀男
(大垣市民・特殊放射線センター)
中野 哲 武田 功
綿引 元 北村 公男
(同・2内)
佐々木常雄
(名大・放)

今回、われわれは過去約 1 カ年間に HBsAg を測定した 3494 検体のうち、陽性を呈した 300 例について Radio-immuno-assay (RIA) Enzyme-immuno-assay (EIA) の各 kit にて HBsAg を測定し比較検討した。

1) 感度: RIA が最も高く、次いで EIA が RIA に近く、R-PHA の順であった。

2) 安定性: RIA が非常に良好、R-PHA, EIA も良好であった。

3) 反応時間: RIA は 6 時間、EIA は 5 時間、R-PHA は 4 時間で測定可能であった。

すなわち、EIA, RIA は感度に優れ、陰・陽性の判定には、非常に適するが、高価であるという難点があり、また、RIA は特殊な施設を必要とする。一方、R-PHA は反応時間、特異性の検定、